書　評

土木学会中部支部　編：
『国造りの歴史――中部の土木史――』
名古屋大学出版会　1988年２月
Ａ５判　286ページ　3,500円

第二次世界大戦前の1936年，土木学会編で『明治以前日本土木史』という大冊が出された。私が若かった頃，主要な新田の一覧表などをつくるのにこの本を用いたことがあるが，土木史というのは歴史地理学とずいぶん縁の深い分野だなと思った。この本は，その後1956年に出た『明治前日本土木史』（日本学術振興会）とともに，今でも大いに役立つ基本文献である。

本書は，1988年が土木学会中部支部の設立50周年に当たるのを記念して企画された出版物であり，副題の「中部の土木史」が，その内容をそのまま示している。本書でいう中部とは，愛知・岐阜・三重・静岡・長野・石川・富山・福井の８県を指している。旧来の地理教科書での中部地方とくらべると，新潟が除かれ，三重が加えられている。また８県のうち福井県の南部は，近畿圏との関係が深いという理由で除外されている。また，対象とする時代は大正以前に限定されているが，その中には，完成が昭和でも着工は大正以前であるものは含められている。

本書は，第Ｉ部物語編と第Ⅱ部資料編から成り，さらに年表，地図，参考文献などが付されている。分量的に全体の約６割を占める第Ｉ部物語編は，20の章に分かれ，中部の各地・各時代を代表する次の20種の土木事業がとりあげられている。

1. 氾濫との闘い――木曽三川の治水
2. 川の流れと人間の営み――木曽川と庄内川
3. 霞堤のルーツを辿って――北陸の諸川と豊川
4. 水に埋れた村――五桂池
5. 蓼科に水を求めて――五郎兵衛用水
6. サイフォンの原理を活かして――辰己用水
7. 城下町に水を引く――芝原用水と福井水道
8. ロマンを運ぶ海流――北陸の港・今昔
9. 山合いに橋の源を探る――中部の奇橋
10. 杠（ちきり）の文化――北斎と夢の百橋
11. 山越えの街道――東山道と中山道
12. 川越しの終焉――大井川の渡しと橋
13. 有料街道の盛衰――小夜の中山と宇津の谷
14. 新橋～神戸間20時間５分――東海道線全通
15. 盆地の下を抜く――丹那隧道の難工事
16. 町ぐるみの大移動――清洲と名古屋
17. 人力車から市電まで――明治・大正期の名古屋
18. しのぎを削る電力会社――中部山岳の発電所
19. 明治24年10月28日――濃尾地震とその復旧
20. 土木の学び舎――名高工と金沢高工

各章の執筆者は，大学の土木工学科関係の方が多いが，ほかに官公庁づとめの方あり，郷土史家あり，また地理学者も２人含まれている。第２章担当の水野時二教授（愛知学院大学）と第14章担当の青木栄一教授である。

各章とも多色刷りの地図やカラー写真をふんだんに用い，土木の専門家以外の人にもわかりやすいように，専門用語を使わず，平易に叙述されている。江戸時代の絵画や明治・大正期の古い写真なども多数掲げられていて，興味深い。

中部の土木というと，誰しもがまず思い浮かべるであろう濃尾三川の輪中地帯のことが，まず第１章にとりあげられ，そして第20章まで上記のようにさまざまのトピックが扱われている。河川の治水・利水事業のほか，大小多くの城下町建設工事あり，東海道・中山道あり，東海道線・丹那隧道あり，日本最大の電源地帯を擁する等，中部という地方は，土木史という観点から見た場合，たいへんバラエティに富んだ地方である。

もっとも，中部地方の土木史上で重要なものが系統的に洩れなくとりあげられているかというと，必ずしもそうは言えない。例えば伊勢湾の干潟干拓事業や北陸の湖沼干拓に関する章がないのは残念であるし，またせっかく明治・大正までとりあげたのであるから，明治用水についても触れてほしかった，といった注文をいろいろつけたくなるわけであるが，それに応えるのが第Ⅱ部資料編である。ここでは古代から大正末までの中部の代表的な土木事業が100件とりあげられ，１件半ページずつ，地図・写真入りで簡潔に解説されている。その中には干拓もあれば，明治用水もある。

さらに67ページにわたる詳細な土木事業年表が付され，また各事業の分布を，河川改修関係，利水関係，陸上交通関係，城郭・港湾関係の４種に分けて４枚の地図で示している。巻末には５ページにわた

り参考文献が挙げてある。

物語編でかなり詳しく述べられている事項の中にも，また資料編で簡単に解説されている事項，年表で年次・所在等が1～2行で記されている事項の中にも，これまで歴史地理学の分野で全くとりあげられていないものが多数ある。そういうものの方が，ずっと多いといってよい。本書を手がかりとして実地調査を進めれば，きっと多くの成果が期待できるであろう。

また本書は中部地方だけしか扱っていない。本書を範として近畿・中四国・九州，あるいは関東・東北について似たような企画を立てることは，おそらく歴史地理学徒でも可能であろうと思う。我々の研究すべきテーマが，身近かなところにいくつでもころがっていることを気付かせてくれ，勇気づけてくれる本である。

（浮田典良）

木下　良　著：

『国府――その変遷を主にして』

教育社　1988年6月

新書判　334ページ　1,000円

著者が歴史地理学の立場から古代の国府の研究をはじめてやがて四半世紀になると，本書の「はじめに」述べている。このように長い年月を費した著者の66国3嶋にわたる精力的かつ克明な調査から導きだされた国府の復原研究の貴重な成果の，せめて一端だけでも公刊されるのが，古代歴史地理学を専攻する者にとって久しく待望するところであった。本書は以下のような構成で，それに応えるものである。

序章　律令国家の国府から王朝国家の国衙へ

1.　国府跡の発掘
2.　国府の立地と形態
3.　国府と交通路
4.　国府と寺院
5.　国府と神社
6.　古辞書類にみる国府所在郡
7.　国司制度と国府の変遷

付録　国府所在地一覧

序章において，8・9世紀の律令国家時代の国府・国庁と，10世紀以降の王朝国家時代の国衙とを区別すべきこと，府中はさらに後世の用語であるとして，研究上の概念の整理を提唱している。大筋において異論はないが，『続日本紀』宝亀11年7月26日条に「長官以下急に国衙に向かひて……」とあるので「国衙」という用法が奈良時代にあったことになり，したがってそれに相当する概念も王朝国家時代に限定しておいては実体を示さないことになろう。上記以外に国治という言葉も『日本後紀』延暦23年正月26日と同24年11月20条にみえるので，国府関連の概念として考慮しておいてもよいと思われる。

国府研究は歴史地理学において長年の蓄積のある部門の一つであることはいうまでもない。米倉二郎や藤岡謙二郎らの先学の視点は，古代の国府の府域が一辺何町かの正方形であるかを現存の地割などによって復原することであった。国府が原則として正方形の形をとることを暗黙の前提としてあったことは否定できない。そのような前提の根拠となっていたのは，周防の国府が「国衙土居八町」とよばれていたことによるものである。しかし，周防国府跡における発掘調査の所見にしたがう限り，国府域の西辺を限るとされてきた土塁は中世末期以後に形成された天井川で，府域を画するような土塁は存在しなかったらしいことが明らかになった。さらに近年の調査では「想定国府域東北隅外側に奈良・平安時代の鍛冶工房跡がみつかったので，国府域は方八町域に限らないことも考えられるようになった」（38頁）という。このことは，歴史地理学の国府の復原研究にとっては重要な意味をもつといってよい。もし，古代の国府が定型をもたないことが一般論としていえるならば，歴史地理学の立場から古代の国府の平面形態の外枠の規模を復原するような従来の視点はその意味を減ずることになろう。

しかし，著者は必ずしも方何町という従来の国府プランの存在を否定してはいない。近江国府について「国府域ははたして方八町の区画内に限定されるだろうか。その意味で，私は従来国府域と称していた部分を府郭といい，府郭外の関連施設分布範囲を国府地域と呼ぶことを提唱したことがあるが，本書では混乱を避ける意味で，従来どおりの呼称で通すことにする。このことを明確にするためにも，国庁跡だけにとどまらず府域内外の広範な調査が期待されるのである。」（47頁）という。確かに著者の意図は古代の歴史地理学に携わってきた者にはよく理解できるのであるが，それならば府郭とは現実にどのような施設としてあったのかということについて改めて問題にしなければならないであろう。

著者が国府プランの復原に他人には測りがたい多